



病院における仮想患者図書館をさぐる —事例を参考に—

松本 純子

I. はじめに

当協議会研究助成金による「仮想患者図書館研究班」の活動は2005年度から開始され、筆者は2006年の7月からメンバーとして会合に参加するようになった。

患者図書館については、雑誌の特集や新聞記事などで目にし、また講演・研修会などを通して話を聴く機会があった。にもかかわらずこれまで関心が薄かったのは、患者サービスの一環として病院が取り組むものであると思っていたからである。ではどうして研究班に入ったのか。それは3年前に当院が受審した病院機能評価にさかのぼる。サーベイヤから患者図書館について尋ねられたとき、要領を得ない返答しかできなかったことが図書館員として遺憾に感じ、それが動機となった。そこでまず研究班の一員となり、わが国の患者図書館の動向を学ぶことから始めた。

まず、取り組むきっかけとなった「病院機能評価」における患者図書館について、次に患者図書館をタイプ別に分け、それぞれを代表する近畿地区の患者図書館4病院の概略を、最後に当院で看護師を対象に実施した「患者図書館についてのアンケート調査」の結果を述べる。

II. 病院機能評価における患者図書館

(財)日本医療機能評価機構が実施する病院機能評価 Ver. 5 (図1) は、患者図書館に関してどの項目で、どのように触れているのだろうか。

1. 病院組織の運営と地域における役割
2. 患者の権利と安全確保の体制
3. 療養環境と患者サービス
4. 医療提供の組織と運営
- 4.15. 図書室機能
5. 医療の質と安全のためのケアプロセス
6. 病院運営管理の合理性
7. 精神科に特有な病院機能
8. 療養病床に特有な病院機能

図1. 病院機能評価 Ver. 5.0の領域

ホームページに掲載されている自己調査評価票を調べてみた。ところが患者図書館というキーワードはチェック項目になく、“患者のための図書館”という表示が、評価項目2「患者の権利と安全確保の体制」の細目に具体的な実践方法の例として挙げられているだけであった(図2)。また、別売の統合版評価項目解説集 Ver. 5には、4.15「図書室機能」の4.15.2.3に対する評価の考え方として、図3のような表現があるのみであった。では、病院に患者図書館があることは評価対象になるのか。それはどの項目で評価されるのか。関連すると思われる1から4の領域を点検したところ、チェック項目から読みとれたのは次のような点であった。

①地域活動における役割としてのボランティアの受け入れ、②患者の権利、③患者サービス・患者満足度、④病院のアメニティ、⑤患者教育、⑥図書館の積極的な関与、などである。

III. タイプ別 患者図書館

全国で「患者図書館」を設置している病院は、

2.2 患者－医療者のパートナーシップ

2.2.1 患者－医療者のパートナーシップを供花する体制がある

2.2.1.1 患者－医療者のパートナーシップを強化する方針が明確である

- ①患者－医療者のパートナーシップを強化する方針が明文化されている
- ②具体的な実践方法を明示している

◇例：抗がん剤投与の際の病状の変化について患者から医療者に知らせる、薬剤投与の際は患者も自分の名前を確認する、患者が医療に参加するための患者向けの教育、患者も参加するカンファレンスを開催する、患者のための図書館、説明を受けた上で自己決定できるための支援など

図2. 評価項目2の細目

4.15.2.3 図書部門の業務改善の仕組みがある

- ①図書委員会などが設置され、業務の改善を検討する場がある

【評価の考え方】…(途中省略)…また、近年は患者・家族または住民向けの保健・医療・福祉関連の図書を整備し、健康教育や医療に関する情報提供に役立てている事例がある。病院の地域に対する啓発活動として評価されるが、図書部門の積極的な関与が期待されている。

図3. 評価項目4の細目 一解説集 Ver. 5 一

今や100施設を超えるに違いない。しかし、その規模・サービス内容・運営方法などは千差万別で、その組み合わせも実にさまざまである。「患者図書館」を分類することには無理があろうが、把握しやすいようサービス内容別とサービス主体別に分けてみた。

サービス内容別では、

- ①医学情報提供サービス図書館：医師や看護師など病院職員が利用する医学専門書も提供する図書館
- ②健康情報提供サービス図書館：例えば、病気のわかる本・食餌療法の解説書・健康を維持するための本などの健康書を提供する図書館
- ③一般図書提供サービス図書館：小説・エッセイ・写真集・漫画などの一般書を提供する図書館。ブックトラックなどを使って行う病棟への巡回サービスも含む。

サービス主体別では、

- ④病院主導型：病院独自の意志によって積極的に準備して実施している
- ⑤ボランティア主導型
- ⑥公共図書館主導型
- ⑤と⑥は病院がボランティアや公共図書館へ

(あるいは公共図書館が病院へ) 依頼・要請しているケースが大半だと思うが、ここでは患者図書館の現場を預かり運営している主体という意味でボランティア主導型、公共図書館主導型とした。

次に患者図書館を代表する大阪と京都の4病院(図書館)について紹介する。図書館を訪問して、あるいは電話にて関係者(司書)に話を伺った。

IV. 近畿地区の患者図書館

1. 京都南病院「図書室」(図4)

医学情報・健康情報・一般書を提供している病院主導型の図書館である。全国で初めて患者に医学情報を提供した病院図書館として有名である。図書館の歴史は古く、医療スタッフのための職員図書室が1966年に設置されている。1970年からは一般図書や健康図書も積極的に備えるようになり、入院患者や地域住民にも図書館を開放しサービスを行うようになった。医学専門書のサービスを考える発端となったのが、患者からの声である。職員用の医学書が一般書を利用している患者の目に入り、「医学書も利

用させてほしい」という要望になったという。2年間図書委員会で検討を重ねた上で、医局会の承認を得て決定し、1997年1月から医学書を患者とその家族・地域住民に公開するようになった。スタッフは専任職員の司書2名、利用時間は、平日9時から18時および土曜日の9時から17時である。



図4. 京都南病院「図書室」

2. 大阪厚生年金病院

「患者情報室－ラヴェンダー」(図5)

健康情報・一般書の提供サービスを行っている患者図書館である。患者情報室“ラヴェンダー”は、病院1階の少し奥まったところにある。

図書館は、専属ボランティアの司書10数名が交替で運営しているボランティア主導型である。利用時間は平日の9時から14時。

開設までの経緯は、2004年12月に病院内の改装に伴って患者情報室を設置することが決まり、2005年1月に患者情報室運営委員会が発足、2005年7月に開設された。

一般図書の巡回サービスは、“ラヴェンダー”が開設される以前の2004年12月から行っており、現在も週2回ボランティアのスタッフ数名がブックトラックに本を積んで病棟へ出向いている。この巡回図書サービスによって、患者が医療情報を必要としていることがわかるようになったそうである。



図5. 大阪厚生年金病院「患者情報室 ラヴェンダー」

3. 京都大学医学部附属病院

「本の広場－ほっこりー」(図6)

主に一般図書を提供する患者図書館である。2000年7月に開設され、現在35名のボランティアが交替で図書サービスを行っているボランティア主導型である。外来棟の3階に位置し、利用時間は月曜日から金曜日の10時から16時。カウンターには午前と午後の交替制でメンバー1名が常駐しサービスに当たっている。

図書館の運営は、日常はボランティアメンバーと大学病院の医療サービス課の職員1名が行っているが、運営に関する重要な事項については、病院の「患者サービス推進委員会」で検討し、承認を得て実施している。大学医学図書館との連携や医学部学生のボランティア参加など、大学附属病院ならではの利点も活かされている。

予算の都合上、大半の図書が寄贈書であるが、最近では製薬会社が発行するパンフレット類などを収集し、提供しているとのことである。



図6. 京都大学医学部附属病院「本の広場 ほっこり」

4. 枚方市立枚方市民病院・星ヶ丘厚生年金病院 (図7)

枚方市立図書館の呼びかけに病院が応じた公共図書館主導型である。内容は一般図書提供サービスである。

1983年に枚方市民病院の屋外駐車場内での自動車文庫による図書館サービスを開始し、その後市民病院の理解を得て、小児科病棟プレイルームへの団体貸出、さらに1995年から市民病院内中央廊下でブックトラックなどによる図書館サービスを実施するようになった。星ヶ丘厚生年金病院でのサービスは、1997年5月から開始した。現在は両病院を交互に金曜日の14時から16時までの2時間、指定された場所で図書館サービスを行っている。貸出冊数は12冊まで、貸出期間は2週間。返却用ポストが設置されている。

閲覧・貸出は患者に限定せず、病院を訪れる枚方市民も対象にしているとのことである。

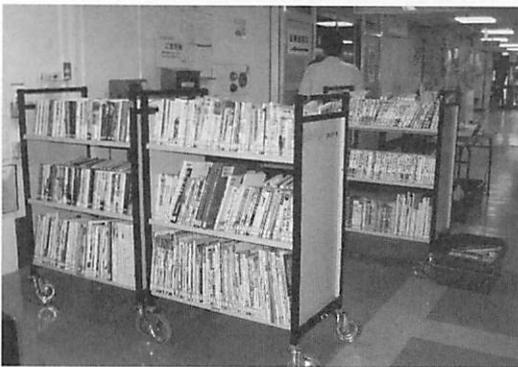


図7. 枚方市立市民病院「枚方市立図書館による図書サービス」

V. 「患者図書館」についてのアンケート調査

2年後に予定されている機能評価に向けて、住友病院における患者図書館設置の可能性をさぐるため、看護師を対象にアンケート調査を実施した。看護師を対象にした理由は、日常患者と接し、患者の療養・診療の補助的役割をしている看護師が、患者図書館をどのように捉えているかを知りたいと考えたからで、看護管理部

に主旨を話し、アンケート調査の協力を依頼した。

実施期間は2007年3月13日から16日。対象は当院看護師長と看護主任50名で、46名から回答を得た。以下はその結果である。

最初に患者図書館を知っているかを尋ねた。「はい」は31名(67%)、「いいえ」は15名(33%)であった。何で知ったかについては、雑誌6名、テレビ6名、研修会5名、他院4名など。患者さんから患者図書館の要望を耳にしたことがあるか、「はい」10名(22%)、「いいえ」36名(78%)。住友病院に患者図書館が設置されるとよいか、「はい」42名(91%)、「いいえ」4名(9%)。「はい」と答えた者の理由は、複数回答で「患者サービスの一環として」38名、「患者さん自身の病気について知る権利がある」30名、「病院のアメニティを高めるため」25名、「患者さんから要望がある」4名であった。

次にⅢのタイプ別患者図書館で述べた分類を示し、当院ではどのタイプの患者図書館が適当であるか(どのタイプを主軸に運営するか)について、前設問で「はい」と答えた回答者に質問した。内容別では、「健康情報提供サービス」33名、「一般図書提供サービス」18名、「医療情報サービス」13名。運営別では、「ボランティア主導型」19名、「病院主導型」16名、「公共図書館主導型」5名という結果であった。

最後に当院に「患者図書館」を設置するのは可能かどうかについて尋ねた。「はい」21名、「いいえ」13名、「その他条件付き」9名で、設置するさいネックになると思うことを順位で回答してもらったところ、1位は「場所」18名、「予算」14名、「人」12名であった。また「病院主導型サービス」を選んだ者に推進する部署を尋ねると、「医学図書部」15名、「事務部」4名で、「看護部」0名であった。

VI. まとめ

今回の患者図書館についての調査をまとめ

ると以下のとおりである。

1. 病院機能評価の項目に明文化されていないが、患者図書館の設置、すなわち患者へ図書提供サービスを行っていることは、病院機能全般に亘って評価されるものと思われる。
2. 患者図書館に基準はなく、さまざまなタイプの複合型で運営されていることが明らかとなった。現実には、病院関係者の理解や、職員・ボランティアの熱意なくしては成り立ちにくく、さらに維持し定着させるのは予想以上に困難を伴うものであると感じた。
3. アンケート調査は一部の看護師を対象に実施したものであるが、91%が病院に患者図書館があれば良いと考えており、場所・予算・人などの障害や課題は多いものの、49%から設置は可能という回答を得た。調査結果を通して、当院における患者図書館の設置は悲観的でないこと、また医学図書部に期待が寄

せられていることなどが分かった。病院図書館司書に何ができるのか、どのような関わり方ができるのかを今後は積極的に探っていきたいと思う。

参考資料

- 1) 日本医療機能評価機構. 病院機能評価について. [引用 2007-03-01].
<http://jcqhc.or.jp/html/assessment.htm>
- 2) 統合版評価項目解説集. 東京: 日本医療機能評価機構; 2005.
- 3) 全国患者図書サービス連絡会編: 患者さんへの図書サービスハンドブック. 東京: 大活字; 2001.
- 4) 奈良岡功, 山室真知子, 酒井由紀子: 健康・医学情報を市民へ. 東京: 日本医学図書館協会; 2004.